

## ■ 受賞者業績

### 「第38回青森県農業経営研究協会賞」受賞者

➤ 氏名 千葉 晋 (ちば すむ)

➤ 年齢 昭和51年生まれ・43歳

➤ 住所 むつ市新町

➤ 経営内容



農業労働力	家族2人（本人、父）
経営の概況	平成30年：繁殖牛56頭・育成牛42頭、所得額471万円
	令和元年：繁殖牛56頭・育成牛44頭（10月現在）

## 【業績】

### 哺育プログラムの大幅改善と飼養頭数の倍増による 安定した肉用牛繁殖経営の実現

千葉氏は、大学卒業後、福島県の製薬会社に勤務していたが、平成23年3月に発生した東日本大震災をきっかけに故郷であるむつ市に戻り、父親の肉用牛繁殖経営を継承し、平成25年1月に就農した。

父のもとで飼養技術を身につけるとともに独学で学び、牛の皮膚糸状菌対策や母子分離方式による人工哺乳の導入など、オリジナルの哺育プログラムを開発・実践し、就農から6年間で繁殖牛飼養頭数を23頭から56頭まで拡大した。

その飼養方法は、第55回（平成28年）全国青年農業者会議「プロジェクト発表（畜産部門）」で最高賞の農林水産大臣賞を受賞したほか、第14回（平成29年）青森県肉用牛共進会「繁殖雌牛の部」で第2位の東北農政局長賞を受賞するなど優れた成績を収めている。

また、平成31年2月には、就農から極めて短期間で青森県農業経営士に認定され、優良系統牛の育成・確保や若手農業者の指導に努め、本県の肉用牛振興に大きく貢献している。

# 1 経営の発展経過と概要

## (1) 就農の経緯

- 平成 11 年 3 月 大学（獣医畜産）卒業
- 平成 11 年 4 月 大手製薬会社（本社：大阪府）の医薬情報担当として勤務
- 平成 23 年 3 月 勤務担当エリアの福島県いわき市で東日本大震災に遭遇
- 平成 23 年 10 月 震災復興に向かういわき市民の姿を見て「地元之恩返しをする」決意を固め、青森県むつ市にUターンし、実家の畜産業の補助を開始
- 平成 24 年 11 月 家畜人工授精師、受精卵移植師の資格を取得
- 平成 25 年 1 月 経営継承し、肉用牛繁殖経営を開始（繁殖牛 23 頭）
- 平成 26 年 4 月 就農施設等資金などの借入により牛舎を新設し、「美付ファーム」としての経営を開始

## (2) 発展の経過

父親の肉用牛繁殖経営を受け継ぎ、平成 25 年 1 月に就農。

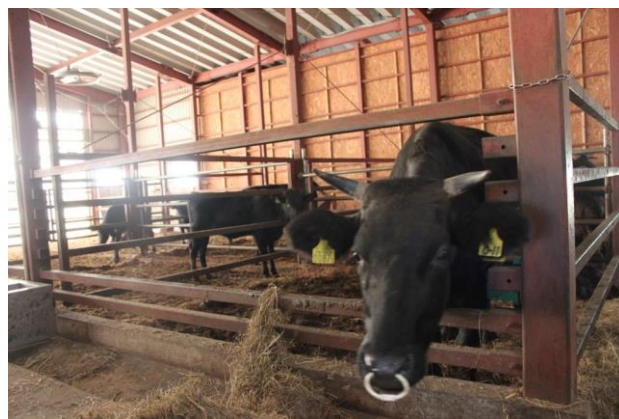
就農当初の繁殖牛飼養頭数は 23 頭であったが、むつ市水川目の美付（びつけ）地区に牛舎を新設し、就農から 6 年間で飼養頭数を 56 頭まで拡大した。

この間、蔓延していた牛の皮膚病の克服や哺育プログラムの改善、飼育スペースの拡大、下痢予防プログラムの実施等を次々と実践し、病気にかかりにくい品質の優れた子牛生産が可能になったことから、極めて短期間のうちに経営が安定した。

## (3) 経営の概要

平成 30 年の経営概要は、繁殖牛 2 頭、育成牛 37 頭の販売による粗収益が 3,113 万円、経営費は 2,642 万円で、所得は 471 万円となっている。

労働力は、経営主が大半を占めているが、父親もわずかであるが手伝っている。



「美付ファーム」牛舎  
広いスペースで牛のストレスを軽減

〈表 1〉 家族と労働力

(令和 2 年 2 月 1 日現在・単位：歳、日)

氏 名	続柄	年齢	年間農業 従事日数	年間兼業 従事日数	役割分担
千 葉 晋	本人	43	340	340	経営全般
	妻		0	0	
	長女		0	0	
	父		140	140	作業補助

〈表 2〉 経営耕地面積

(平成 30 年・単位：a)

地 目	面 積			
	所有地	借入地	共有地	計
採草放牧地（借地）		500		500

〈表 3〉 家畜の飼養状況

(平成 30 年・単位：頭)

畜 種	飼養目的	品種	年度始 頭数	年度末 頭数	年間販売 頭数
肉 用 牛	繁殖	黒毛	54	56	2
	育成	黒毛	41	42	37

注 1) 育成の年度始頭数（41 頭）のうち 37 頭は販売、4 頭は繁殖に繰入

注 2) 育成の年度末頭数（42 頭）は、繁殖牛から生まれた子牛の頭数



## 2 経営の特徴

親牛の繁殖性の向上と子牛の生育管理のため、生後2～3週間で母子分離方式の人工哺乳による飼養管理を実施している。

「美付ファーム」を経営した当時、牛の皮膚糸状菌症（人畜共通で感染する皮膚病）が多発し、その要因のひとつには、子牛に何らかのストレスがかかり健康バランスが崩れていることが問題と考え、次の原因療法と対処療法を行った。その結果、皮膚糸状菌症の症状は、ほぼ0%に減少した。

### （1）オリジナルの哺育プログラムの開発 ～さらなる原因療法～

#### ① 母子分離の時期を生後3日から2～3週間に延長

経営的には、できるだけ早期の母子分離が望ましいが、母子分離による子牛の精神的ストレス緩和が必要と考えた。

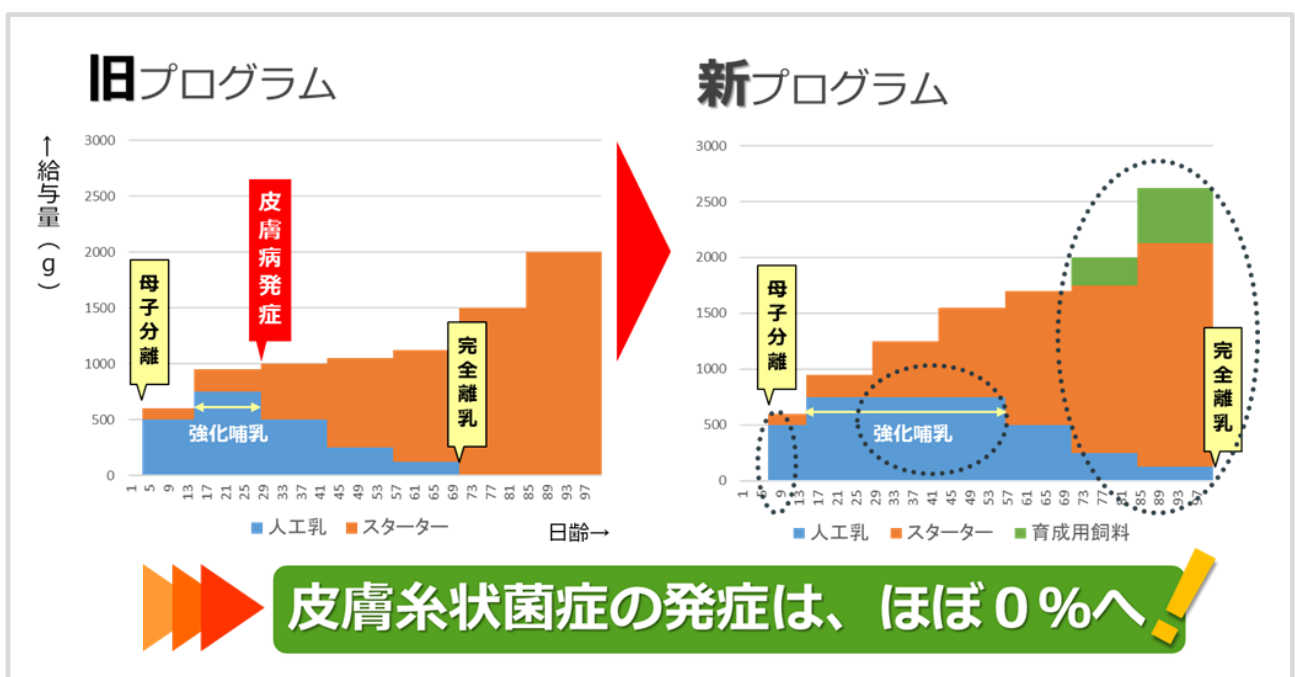
#### ② 強化哺乳期間を2週間から6週間に延長

子牛の栄養状態の強化と、哺乳欲求のストレス解消のため、代用乳を増給した。

#### ③ 哺乳期間を生後60日間から100日間に延長

子牛の内臓と骨は、比較的早い段階（肺：約80日、腸・肝臓：約105日、骨：約150日）に生育のピークを迎えるため、十分なエネルギーの補充が必要と判断した。これにより、離乳ストレスの軽減にもつながると考えた。

《図1》「美付ファーム」の哺育プログラムの改善



## (2) 効果的な予防対策 ～対症療法の組み合わせ～

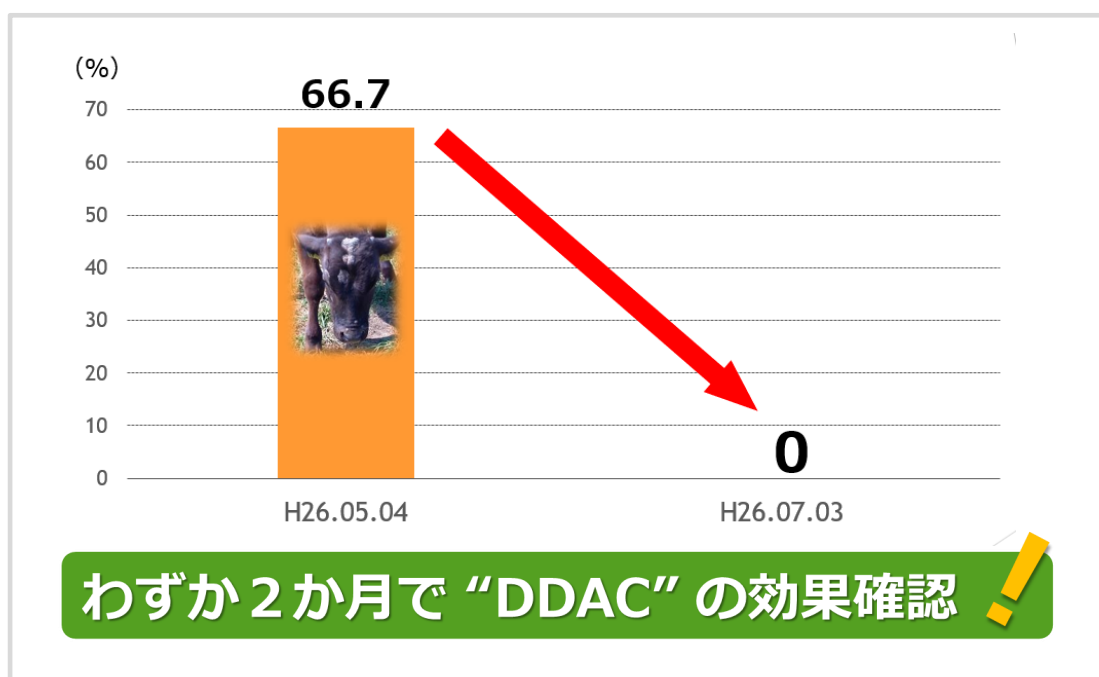
### ① 哺育スペースの拡大

牛舎は牛1頭当たり1坪のスペースを確保し、ストレスの軽減を図っている。  
また牛舎前に放牧地を配置することにより、省力的な放牧管理を行っている。

### ② DDAC（塩化ジデシルジメチルアンモニウム）による消毒

牛の罹患部と牛舎内の鉄柵等に消毒薬を噴霧したところ、わずか2か月で罹患牛の割合が激減した。

《図2》「美付ファーム」における罹患牛の割合の変化



### ③ 下痢予防

子牛の下痢（主にコクシジウム原虫）予防のため、サルファ剤とイベルメクチン製剤を効果的に組み合わせた予防プログラムを実施している。

### ④ 貧血改善

子牛の生理的貧血改善のため、鉄錠剤投与や安定した品質のドライTMR（牛が必要とするすべての飼料成分が均一に保たれた混合飼料）の利用により、健康管理を徹底している。

### ⑤ 免疫力強化

出生早期（生後1週間）に経鼻ワクチンを接種することで免疫力の強化を図っている。

### (3) 高品質牛の安定生産

哺育プログラムの開発・実践や哺育スペースの拡大等により、子牛の1日の増体量が大幅に改善し、出荷日齢が29日間短縮された。これにより、子牛1頭当たりの主な経費（飼料費：7.5千円、診療衛生費：8千円）も削減された。

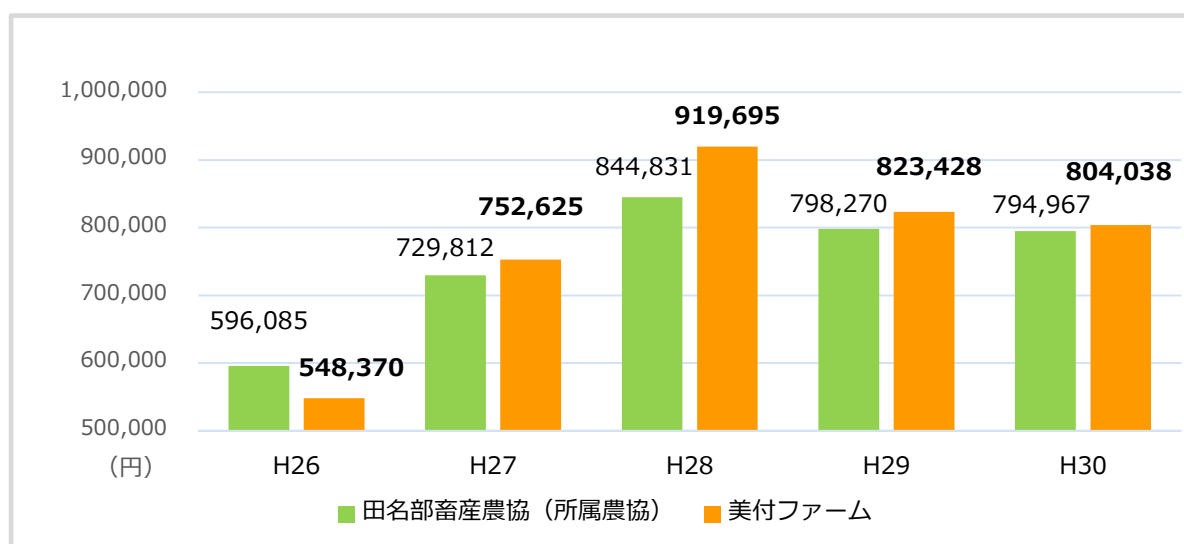
また、子牛の市場価格において、平成26年は地域平均を下回っていたが、平成27年以降は市場との価格差も圧縮され、現在は地域平均を上回るようになった。

子牛を健全に育てるため、千葉氏は、「牛を病気にさせないことが一番ではあるが、病気をしても軽度で済むようにするには、『良く観察する』ことが本来の仕事であり、餌やりや清掃は作業である。」と言う。安定した高品質牛の生産を実現したのは、日々の観察・管理を確実に実践したことが極めて大きい。

《図3》子牛の増体量好転が経営コスト減へ



《図4》子牛市場取引価格



〈表4〉農機具の所有状況

(平成30年・単位：台、円)

No.	種 類	規格・能力	台数	取得年	取得価額
1	トラクター	72PS	1	平成25年	7,439,000
2	トラック	4t・2t・1.5t	3	平成25・28年	2,000,000
3	タイヤショベル	40PS	1	平成26年	5,000,000
4	バークリーナー	—	1	平成28年	2,268,000
5	ディスクモア	—	1	平成25年	譲渡品
6	レーキ	—	1	平成25年	譲渡品
7	ロールベアラー	—	1	平成25年	譲渡品
8	フロントローダー	—	1	平成25年	譲渡品
9	テッター	—	1	平成25年	譲渡品

〈表5〉施設・建物の所有状況

(平成30年・単位：㎡、円)

No.	種 類	構造	規模	取得年	取得価額
1	牛舎（事務室含む）	木造	969	平成26年	36,750,000
2	乾燥舎	木造	172	平成29年	7,439,000



「美付ファーム」外観

〈表6〉 経営収支（平成30年）

粗 収 益 = [ ] 円  
 経 営 費 = [ ] 円  
 所 得 = [ ] 円

（単位：円）

費 目	経営全体	備 考
粗 収 益	[ ]	
経 営 費	[ ]	
租税公課	[ ]	
飼料費	[ ]	
農薬・衛生費	[ ]	
修繕費	[ ]	
動力光熱費	[ ]	
農業共済掛金	[ ]	
減価償却費	[ ]	
荷造運賃手数料	[ ]	
地代・賃借料	[ ]	
研修費	[ ]	
事務通信費	[ ]	
その他	[ ]	[ ]
所 得	[ ]	



### 3 地域農業への貢献

平成 26 年 3 月から下北地方和牛改良組合の理事を務め、優良系統牛の育成・確保に尽力するとともに、高齢化や後継者不足に対応する「和牛ヘルパー制度」を提案し、自ら推進員として創設準備を進めるなど、地域農業の課題解決のため先頭に立って取り組んでいる。また、平成 31 年 2 月に青森県農業経営士に認定され、平成 31 年 4 月から下北地区指導農業士会副会長として、若手農業者への助言・指導を積極的に行っている。

このほか、地元小学校の P T A 会長を務め、将来的な担い手育成の観点から職業紹介や職業体験の講師として畜産業に対する子どもたちの理解を深めるなど、地域農業や農村の活性化に大きく貢献している。

### 4 今後の展望と課題

今後は、繁殖牛の分娩間隔を 433 日から 365 日に短縮することで子牛の生産体制を強化し、さらなる所得の向上を目指している。また、将来的には、下北地域の畜産業をアピールするため、生産物である牛肉を地元の人にも食べてもらえるよう牛舎を拡大し、繁殖肥育一貫体系をスタートさせたいと考えている。

さらには、地元特産の夏秋いちごやブルーベリーなどを餌に入れた「下北牛～ベリー仕上げ～」のようなブランド牛の生産にも夢を膨らませるが、これらの実現には、労働力の確保が課題となっている。自身が推進する「和牛ヘルパー制度」が整えば、周辺農家の離農を延命することにもなり、地域農業の活性化へもつなげたい。

就農当初から経営の課題解決に取り組み、数年で安定した経営を実現し、現在は農業者のリーダーとして活動していることは、若手農業者や新規就農者の良い手本となっている。今後も、地域農業の将来を見据えた活動について期待されている。



農村青年リーダー研修会（講師）